中国がわかるシリーズ17　仏教の浸透と南北朝時代の幕開け

ライフネット生命株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口治明

中国では、晋の時代に、竺法護（敦煌に生まれた大月氏の人）が仏典の漢訳を行い、仏教が中国に浸透し始めました。310 年には、高僧、仏図澄が西域より洛陽を訪れました。仏図澄は、羯族・[後]趙（319～351）の石勒、石虎（残虐な非道でも有名な皇帝）の帰依を受け、石勒より大和尚の称号を授けられました。中国の仏教受容は、西域僧が、異民族（五胡）の領袖の帰依を受けて布教に努めたことがその出発点となっていますが、中原に王朝を樹立した異民族にとっては、圧倒的な中華の文明に対抗する何か精神的な拠り所が欲しかったのでしょう。また、乱世にあっては、来世での救済を説く仏教が庶民の心を動かした側面もあったのだと思います。仏図澄は、仏典の漢訳は行いませんでしたが、後進の育成に努め、その門下からは、中国仏教の基礎を築いた釈道安などの名僧が続出しました。

351 年、[後]趙が滅んだ後、華北の覇権は、氐族の[前]秦（351～394）に移ります。背教者ユリアヌスの同時代人、3 代苻堅（357～385）は、やはり理想家肌の名君で、漢人将軍、王猛を用いて 376 年に華北を統一しました。苻堅は余勢を駆って、中国統一に乗り出しますが、383 年、ヒ水の戦いで東晋軍に破れました。理想家肌の苻堅は、降伏した漢人の敵将達を赦しては自軍に組み入れていました。苻堅は、彼等が儒家の教える通り恩義を感じて懸命に奮闘するものと楽観していましたが、名宰相、謝安の率いる東晋は漢民族の本家とも言うべき政権であり、土壇場で彼等は裏切ったのです（謝安は、勝利の報を聞いた時、来客と囲碁の対局中でしたが、常と変わらぬ態度で対局を続けました。しかし、来客を送り出した後は、興奮のあまり、下駄の歯が折れたことにも気づかなかったと云われています）。なお、釈道安の要請を容れて、西域の亀茲より、名僧、鳩摩羅什を招いたのも苻堅でした。しかし、彼の到着を見ることなく、苻堅の夢は潰え去ったのです。

政治的には、華北政権に圧倒されていた江南の地では、飲茶の習慣が始まるなど優雅な貴族文化が花開きました。この文化を六朝文化と称します（三国時代の呉、東晋、南朝の 4 王朝）。353 年 3 月 3 日、紹興の蘭亭で曲水の宴が開かれました。この時、主催者の書聖、王羲之（王導のいとこ）が書いた蘭亭序は、書道史上、最も有名な作品となりました。行書や草書は、王羲之によって大成されたのです（楷書の完成はやや遅れて唐初の時代になります）。王羲之とその子、王献之は、後に二王と評されました。女史箴図を描いた東晋の顧ガイ之は画聖と呼ばれました。また帰去来

Copyright　ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
発行人：岡本和久、発行：I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社
URL: http://www.i-owa.com；E-mail: info@i-owa.com

辞や桃花源記（桃源郷）で有名な陶淵明（365～427）は田園詩人として名を残しました。

華北では、401 年、インド人の血を引くシルクロード、亀茲国の人、鳩摩羅什が、［後］秦の姚興に迎えられて長安に入りました。鳩摩羅什は多くの経典の漢訳（玄奘の新訳に対して旧訳と呼ばれています）を行うとともに3000人を超える門弟を育て上げ、中国仏教史上、最大の功績者の1人となりました。現在、わが国仏教界で使われている経典類も、元を辿れば、鳩摩羅什に行き着くものが多いと云われています（色即是空など）。東晋の僧、法顕は、訳典に飽き足らず、還暦を過ぎてからなお志を失わず、遠いインドへ、陸路、求法の旅（399～412）に出ました。インドは、グプタ朝の最盛期、チャンドラグプタ 2 世の時代であり、その記録は「法顕伝」として纏められました。但し、過酷な長旅を終えて、海路、帰国したのは、十数名のミッションの中で、最年長の法顕だけだったと伝えられています。

韓半島では、三国時代が始まりました。紀元前 1 世紀に、夫餘の跡を受け、中国東北地方から韓半島北部、鴨緑江の辺に建国したツングース系の高句麗は、長い雌伏の後、魏の攻撃を耐え凌ぎ、313 年、楽浪郡と帯方郡を滅ぼして強国に伸し上がろうとしたのですが、342 年に、［前］燕（鮮卑、慕容部）に首都を落とされ、服属せざるをえなくなりました。また、371 年には、4 世紀に入って強勢となった半島西部の百済（夫餘、高句麗系。首都は漢城。ソウル近辺）に攻め込まれ、故国原王が殺されました。372 年には、［前］秦より仏像経文を受け入れ、高句麗にも仏教が伝わりました（百済の仏教伝来は、384 年、［東］晋よりとされています）。この頃、百済が倭に 7 支刀を贈ったようです（石上神宮蔵）。

4世紀の半ばを過ぎる頃、半島東部（慶州が中心）に新羅が登場しますが、新羅の古墳からは、黄金製品など、高句麗や百済とはかなり異質な文物が数多く出土しており、新羅は北方遊牧民系（鮮卑？）の王朝と見られています。高句麗は、広開土王（391～412）の時代に、百済に攻め込み、臣従を誓わせ、新羅も従えました。百済は、東晋、倭と結び、高句麗に対抗しようとしました。414 年、息子長寿王（413～491）によって建てられた広開土王の碑文は、三国と倭の輻輳した国際関係を伝えています。碑文の解釈は確定していませんが、高句麗が 20 代長寿王の時代に中国の東北地方、遼東半島、朝鮮半島の大半を影響力下に置き、極盛期を現出したことはほぼ確実です。長寿王は、427 年、南方の拠点、平壌に遷都しました。なお、高句麗、百済、新羅、倭（部民制）には、その国制に共通して「部」という制度が見られますが、これは鮮卑の軍事行政的な制度（［北］魏の八部制など）が、その淵源であると考えられています。

鮮卑の有力 6 部族の 1 つ、拓跋部が建てた代は、［前］秦の苻堅によって滅ぼされましたが、淝水の戦い後、息を吹き返し（国号を魏と改める。［北］魏）、439 年、3 代、太武帝（423～452）の時代に、遂に華北を統一しました。これから隋の統一までの時代、約 150 年間を南北朝時代と呼んでいます。江南の地では、403 年、桓玄（桓温の子）が、一時、東晋を滅ぼし、楚を建国しましたが、404 年、北府の寒人（下級の軍人や官吏を指す言葉。伝統的な貴族に対して用いられます）劉裕のクーデ

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社

タにより、桓玄が殺され、東晋は復興しました。劉裕は、北伐を敢行し、410 年、山東半島の［南］燕を、417 年には、長安を陥れ、［後］秦を滅ぼしました。また、412 年には土断（元は桓温の政策で、華北からの移住者を現住所の戸籍に登録するもの。それまでは、移住者は、別の戸籍に登録され、税役負担等も異なり、混乱を招いていました）を実施しました。こうして、人望を得た劉裕は、420 年、ついに東晋を滅ぼし、宋（［劉］宋。～479）を建国します。東晋が滅んだことで、漢人貴族の正統王朝に対する信頼感も揺らぎ、宋よりも［北］魏を選択する気運が昂じてきました。

なお、421 年には、倭王讃が劉裕（武帝）に朝貢しています。その後、珍、済、興、武、の 5 王が、宋、斉、梁に朝貢して位を授けられました。いわゆる倭の五王です。五王については、大和政権の王に比定する意見（多数説）と九州王朝説とがありますが、倭王の朝貢の目的が、緊迫する朝鮮情勢を睨んだものであったことは明らかです（413 年と 478 年の間に少なくとも 9 回は朝貢しています。最も、何故、中国の大半を押さえていた北朝ではなく南朝に朝貢したのかという問題は残りますが。おそらく、劉裕が中国への渡航ルートである山東半島を押さえたことが、直接の要因であったのでしょう）。

Copyright ⓒI-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社